

## 現代小説における物語構造分析手法の検討

金子沙織<sup>†</sup> 内田彩子<sup>†</sup> 藤井瑤子<sup>†</sup> 高田明典<sup>†</sup>

フェリス女学院大学文学部<sup>†</sup>

### 1. はじめに

「ポストモダン小説」は、まだ日本においては主流の作品区分ではないものの、米国においてはすでにかなり普及しつつある娯楽小説のジャンルである。アメリカ文学においては、ポストモダン小説は主流に近いものとして受容されていると言える。特に、トマス・ピンチョン、ドナルド・バーセルミ、ジョン・デリーロ、などのアメリカ文学の小説家の作品は、商業的にも成功し、娯楽作品として広く受容されていると言える。一方、日本文学において明確に「ポストモダン小説」に分類されるものは、それほど多くない。また、日本においては、高橋源一郎、島田雅彦、小林恭二などの作品が「ポストモダン小説」とされる場合が多いが、その作風は、ピンチョンやバーセルミなどの作品とはかなり趣を異にしている。しかしながら、確固たる物語展開を有しないことから、既存の物語構造分析の手法を用いてポストモダン小説を分析し、その訴求構造を同定することは困難となっている。

物語構造分析の手法を考えるならば、「構造」「関係」を抽出しにくいポストモダン小説においては、物語構造分析的な手法を援用してそれらの小説を分析することは容易ではないとされる。しかし、娯楽作品として成立している小説であることから、そこには何らかの訴求構造が存在していることが予測される。

本研究においては、ポストモダン小説に分類される作品の物語構造分析を通して、それらの訴求構造の分析手法を検討することを主たる目的とした。同時に、既存の物語文学とは異なるポストモダン小説特有の訴求構造を明らかにすることを試みた。

もしも、従来の物語構造分析において分析することのできない訴求構造が存在するとすれば、それが「どのよ

うな要素」によって不可能となっているのかについて検討することは、物語構造分析の手法を精緻化したり、その分析手法の改善に鑑みると、それらに大きく資することになると思われる。特に、ポストモダン小説においては特定のシーケンスが存在せず、また、ストーリー構造が明確でない場合が多いとされることに鑑み、ストーリー構造の分析手法の一つである「シーケンス分析」の手法を使用して分析し、その問題点や得失について検討することとした。

### 2. 方法および手続き

#### 2.1. 分析対象

分析対象としては、以下の短編小説を選択した。

ジェイムズ・ボイラン「フランケンシュタインの花嫁」

ジェイン・ローダー「ワイルドアメリカ」

エリック・マコーマック「帯の道」

ピーター・ケアリー「デブ連歴史に登場」

トマス・ピンチョン「低地」

ガルシア・マルケス「年をとった男」

ガルシア・マルケス「失われた時の海」

このうち、ガルシア・マルケスの短編小説は「ポストモダン小説」に明確に分類しうるものとは言えず、通常の（ポストモダン小説ではないという意味での）小説に近いものであると考えられている場合が多い。本研究においては、そのような「中間的位置」に分類される小説をあわせて分析することにより、比較検討することとした。また、上記以外の通常の小説も分析対象とし、それらの比較検討を行った。

#### 2.2. 分析手法の概要

##### 2.2.1. シーケンス分析

シーケンス分析とは、物語の連鎖パターンを抽出する作業のことを指す。たとえば、

物語 1 : F1 - F2 - F3 - F5 - F8

物語 2 : F1 - F4 - F6 - F7 - F8

という二つの物語構造（話素のシーケンス）が抽出され

たときに、

物語 1 : F1 - F2 - F3 - F5 - F8

物語 2 : F1 - F4 - F6 - F7 - F8

と考え、「この二つの物語は、一つの話型 (F1 - F2 - F3 - F4 - F5 - F6 - F7 - F8) からのバリエーション (派生型) である」という類の分析を行うのが「シーケンス分析」であると言える。もしくは、上記のような物語を複数分析し、その結果として「原形となる話型を同定する」ことが、シーケンス分析の目的となる。クロード・ブレモンは前述の「物語 1」として示したシーケンスが語られた場合に、そこから「物語 1a~1c」として示したような「下位シーケンス」を抽出する方法を検討した。語られたシーケンスとは、映像として直線的に並べられた「視聴者から見た」シーケンスであり、「物語のシーケンス」とは、「その物語に内在されている連鎖」である。たとえば、前の例の「物語 1」は、「映像や小説」のシーケンスとしては、

物語 1 (語られたシーケンス)

: F3 - F1 - F2 - F4 - F8 - F5 - F6 - F7 - F9

となっているかも知れない。小説や映像作品などにおいては、「物語のシーケンス」がそのまま「作品のシーケンス」とはならない場合も多い。このような「語られたシーケンス」から、「物語のシーケンス」を抽出するためには、「上位の (メタな)」判断基準が必要となる。ブレモンは、その「上位の基準」として、以下を定置している。

(1) 行為や事件の可能性を《開く》状況 (その潜在的性質が現実化するという条件のもとに。)

(2) その潜在的性質が現実態に移行する (たとえば《可能性を開く》状況に含まれる鼓吹に応える行為をする)。

(3) その行動の終わり。成功あるいは失敗によって発展過程を《閉じる》。

たとえば、「語られたシーケンス」が

: A - B - C - D - E - F - G - H - I

であるとする、以下のように三つのシーケンスが得られることになる。

物語 1a : A - E - H

物語 1b : B - C - I

物語 1c : D - F - G

## 2.2.2. 話素の抽出および行為項分析

シーケンス分析の結果を受けて、その物語の話素を抽出し、行為項分析を行った。

## 2.2.3. 訴求構造の同定

行為項分析の結果から、関係を抽出し、関係軸の抽出を試みた。

## 3. 結果および考察

今回の分析によって、ポストモダン小説においてもシーケンスの存在を特定することができたが、シーケンスとして抽出された物語構造は、従来型の小説とは異なる形式であることがわかった。その相違点としては、

(1) シーケンスの「空白」部分が多い

(2) シーケンス要素間のつながりが不明確であるものが存在する。

ということを指摘しうる。これは、ポストモダン小説においては、読者の解釈の自由度が大きいという指摘に一致する。それは、それらの作品が「開かれた物語」であることを意味しているが、その「開かれ」と訴求構造の関係については、今回分析対象とした作品のうちの一部においてしか特定することはできなかった。しかし、従来、物語構造分析の適用が困難だと考えられていたポストモダン小説に関しても、シーケンス分析などの手法を用いて分析することが可能であることが示唆された。今後、シーケンス分析などの手法をさらに検討することによって、小説だけではなく多くの娯楽作品の分析手法として利用可能とすることを視野に入れつつ、手法の精緻化を図りたいと考える。

### 【参考文献】

『positive 01 - ポストモダン小説、ピンチョン以後の作家たち』、書肆風の薔薇、1991

トマス・ピンチョン (著) 志村正雄 (訳) スローラーナー 筑摩書房、1994

ガルシア・マルケス (著) 鼓直 (訳) 木村栄一 (訳) エレンディラ 筑摩書房、1988

ジョナサン・カラー (著) 荒木映子 (訳) 富山 太佳夫 (訳) 文学理論 岩波書店、2003

新田義弘 (他編) テキストと解釈 岩波書店、1994

高田明典 ポストモダン再入門 夏目書房、2005

クロード・ブレモン (著) 坂上脩 (訳) 物語のメッセージ 審美社、1975